

## 2 土器の出土のあり方について

### (1) はじめに

土器の一次整理では、「残存状態に関する分類基準」(Ⅲ章4節参照)を設定し、作業を進めた。当初これは、復元の可能性のある破片や、型式の特徴を把握しやすい口縁部、底部のものを、効率よく認識するために定めたものである。緊急発掘調査という様々な制約の下で、すみやかに出土土器の型式を判断すること、より多くの復元資料を得ることを目的している。ただし、これは遺物について、資料的な価値に差を生じさせるものではなく、緊急発掘調査において能率的に作業を進め、よりよい成果を目指すために用いた便宜的な基準である。

この分類について、過去二つの調査において実践した(北海道埋蔵文化財センター 1998、1999)。これらの場合では、ランクについて先に説明した目的にのみ用い、報告文中には用いていない。

土器のランクは、その破片の残存のあり方を表すものである。はじめに、土器のランクについて整理し、それが生じるの要因を考える。それから、土器の分布について簡単にまとめておきたい。

### (2) ランクの決定方法

ランクは、土器の出土状況、形態、破片部位、残存状態により決定した。土器の分類作業は図66の流れで行った。以下図の項目について説明する。

#### 1. 出土状況

「まとまり」；ある特定の空間に1個体のみが出土した状況。また、複数の個体がみられる場合は「混在」として区別する。

「散在」；特定のまとまりがみとめられない状況。

\*「まとまり」であれば、以下の項目は問わずにAランクとする。「混在」の場合は個体識別を行い、各個体それぞれをAランクとする。混在する個体の一つが単体の破片である場合、その破片は「散在」のものとして扱う。これらは以下の項目でさらに分類する。

#### 2. 形態

「器状」；ある個体が特定の部位だけでも、容器としての本来的な形態を有するもの。完形のものもこれに含まれる。

「破片状」；容器としての形態を失い、破片となっているもの。

\*「器状」であれば以下の項目を問わずAランクとする。「破片状」のものは以下の項目でさらに分類する。

#### 3. 破片部位

「口縁部」；口唇部を有するもの

出土状況	形態	破片部位	残存状態	ランク
「まとまり」----- (「混在」も含む)				A
「散在」	「器状」	-----		A
		「破片状」	「口縁部」-----	B1
			「底部」-----	B2
			「胴部」-----	C
			「剥離・剥落」-----	D
			「摩耗」-----	E
			「小破片」-----	F

「底部」；底面を有するもの

「胴部」；上記以外のもので、頸部や肩部等も含む。

\*「口縁部」、「底部」については、破片の残存状態を問わずにそれぞれB1、B2ランクとする。両者からは土器型式が判断しやすい。「胴部」は以下の項目でさらに分類する。

#### 4. 残存状態

「剥離・剥落」；器表面が剥がれた状態

「摩耗」；摩耗し丸みを帯びた状態

図66 ランク分類の方法

「小破片」；小型の破片となった状態

\*「剥離・剥落」のものはDランク、「摩耗」のものはEランク、百円玉程度以下の破片を「小破片」とし、Fランクとする。これらに該当しないものをCランクとする。D・Fランクは接合するが、器形を復原することに影響がない場合がある。Eランクは接合するのが困難である。また、これらのランクのほとんどが型式の判断（時期分類）も困難であるのが通例である。

### (3) ランクの内容

ここで取り上げるランクは残存のあり方に関わるもの、すなわちA、D、E、Fランクである。

#### 「Aランク」

##### 1. 同一個体の土器がまとまった状態で出土したもの

このケースは大きく三つに分けられる。

##### (1) 完形のもの

(2) 底部等、一部分であっても器としての形状を留め、周囲に同一個体の破片が認められるもの

(3) すべて破片であるが、まとまっているもの

##### 2. 器の形状を保った状態で出土したもの（器状）

#### 「Dランク」

剥離・剥落している胴部破片。

#### 「Eランク」

割れ口や器面が全体的に摩耗している胴部破片。

#### 「Fランク」

胴部の小破片。

### (4) 遺跡形成過程とランク

土器の残存のあり方に差異がみられることは、「遺物形成とともにいかに考古記録が形成されるか」（五十嵐 1999）を考える「遺跡形成過程(site formation process)」で扱われる内容である。マイケル・シファーなどにより理論的な枠組みが提示され(Schiffer 1972 西藤訳 1983)、近年日本でも論議されつつある分野である。

人為物が過去の人間活動のなかで、その機能を果たしている状況を「体系的状況(sysytematic context)」、人為物が棄てられ、機能を失った状態で、遺物として認識されるまで周囲の自然環境と関わっている状況を「考古学的状況(archaeological cntext)」という。前者は動態であり、後者にも「動き」の要素は介在するが、研究者が認識するのは静態としての一つの段階である。遺跡形成過程研究とは、我々が発掘調査で認識する静態としての考古学的状況から、過去の人間活動という動態について推論する中範囲理論(middle range theory)の一つである。

人為物（遺物）の状況(context)が変換する作用については、その原因から大きく二つに分けられる。一つは人為的な作用（以下「人為作用」）で、もう一つは自然的な作用（以下「自然作用」）である。前者は「文化形成過程(cultural formation process)」、後者は「非文化形成過程(noncultural formation process)」とよばれる。この遺跡形成過程における作用が、土器の残存のあり方にどのような影響を与えるのか考えていく。

土器のライフサイクル、すなわち土器が製作・使用され、そして棄てられる。その後埋没し周囲の環境から影響を受け、発掘調査で確認されるまでの一連の流れを想定し、図67に示す。

土器が体系的状況の中で機能している段階から、それらが廃棄（広義）されるには三つのあり方がある。すなわち「遺棄」、「廃棄」、「放置」である。「遺棄」は使用空間に棄てられる場合、「廃棄」（狭

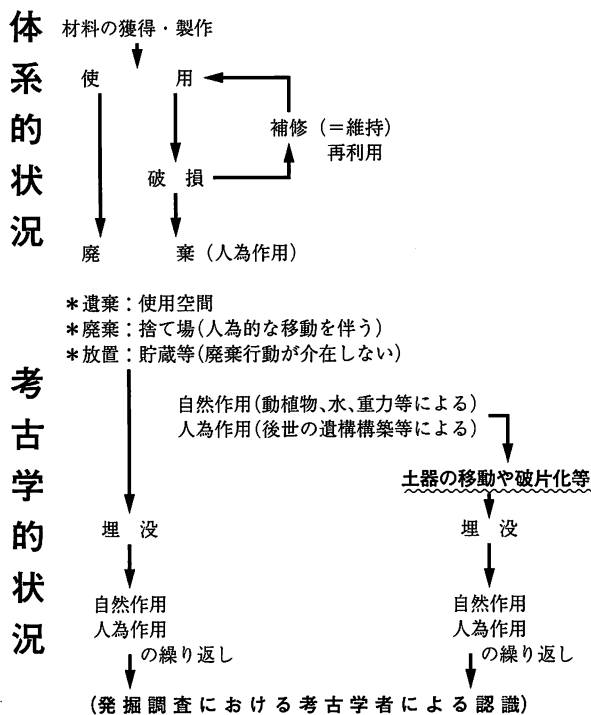


図67 土器のライフサイクル

といった人為作用、また、主として考古学的状況における自然作用として、土中における動植物の影響等が考えられる。剥離・剥落破片はあらゆる段階で生じる。

#### E ランク

完形が摩耗するといった場合を無視すると、すべて破片となった後、考古学的状況のあらゆる段階で生じる。一般的には水による移動といった自然作用により生じると考えられる。

#### F ランク

小破片は、両状況のあらゆる段階において生じる。体系的状況において、少し損なわれた程度の土器なら使用されたであろうと推測される。また、廃棄後の考古学的状況においては様々な作用が影響する。土器の壊れ方は、はじめ器の形状が損なわれ、破片となる（破片化）。さらに、その破片が小さく割れていく（小破片化）という傾向（立体性が失われる→偏平化→小破片化）があると考えられる。特に、人為的な耕作等が包含層に及ぶ場合、遺物の破片化及び小破片化が進む。

#### (5) ランクの解釈

上記のことをふまえると、各ランクからその出土位置については次のように解釈できる。

#### A ランク

完形で出土したものは人為的あるいは自然的な影響で動いた可能性は少なく、概ね本来的な位置を留めていると判断できる。完形ではないが、まとまって出土したものもほとんど動いていない、あるいは、動いたとしても個体の状態の時点であると考えられ、出土した位置で破片が生じたと判断される。器状のものは動いている可能性はあるが、立体的なものほど破片になりやすい傾向があると考えられ、このことから器としての形状を保っているものは、あまり移動していないと推測できる。すなわち、確認されるAランクの考古学的状況は、過去の体系的状況を比較的反映していると考えられることができる。

Aランクの出土位置は、廃棄（広義）された位置とほぼ同じである可能性が高い。また、廃棄された位置は体系的状況における人為作用により決定される。「遺棄」、「廃棄」、「放置」の区別は、その

義）は使用された空間から人為的な移動により他の場所に棄てられる場合、「放置」は棄てるという意識がなく、貯蔵していたものが忘れられた場合等をいう。また、土器以外の遺物はもちろんのこと、遺跡そのものも廃棄という人為作用により、体系的な状況から考古学的状況に変換するといえる。

図67から各ランクがどの段階において、どのような作用で生じるかを考える。

#### A ランク

人為物が廃棄（広義）された段階で生じる。その後の考古学的状況においては、あまり自然・人為作用を受けず、まとまった状態を保っている。

#### D ランク

体系的状況において、そして考古学的状況のあらゆる段階で生じる。剥離・剥落が生じる原因は、体系的状況における使用による器面の劣化・損傷

周囲の状況により判断できる場合がある。

#### D ランク

あらゆる段階で生じる。ただし、剥離（剥落）面の状態から一つの推測が可能である。剥離面が摩耗した状態のものは、剥離後に移動していると考えられる。一方、剥離面が明瞭に残存しているものは、考古学的状況の新しい段階で生じたか、ほとんど移動していない可能性が考えられる。

D ランクの出土位置は、廃棄された位置を明確に反映しておらず、両状況における人為・自然作用の影響による無秩序な結果といえる。ただし、剥離面の状態から移動の可能性を推測できる。

#### E ランク

礫の「円磨度」の概念を適用した考え方で、二次的な移動を考える目安となる。全体が顕著に摩耗しているものは、頻繁にあるいは長距離を移動した可能性が高いと判断される。ただし、地表面に遺物が露出している場合、雨水等で器面が損なわれ、摩耗した状態となることがありうる。しかし、この場合、摩耗した面が一部にしかみられない。

E ランクの出土位置は、考古学的状況における自然作用による移動の結果と考えられる。

#### F ランク

あらゆる段階で生じる。F ランクは両状況における人為・自然作用による無秩序な結果と考えられる。

以上のことをまとめると次のようになる。A ランクの位置はその時期の活動空間を、E ランクの位置は移動した結果をそれぞれ示している。また、D・F ランクの位置は無秩序な結果と考えられる。

#### (6) 分布図の解釈

V 章の図33～36の分布図から、遺跡における各時期の活動空間を推測してみたい。ただし、各群の D・E・F ランクの分布図は作成していないので、A ランクのものを中心に進める。また、ここでは B1・B2・C ランクのものは、グリッドを越える程度の規模の移動はしていないと仮定する。

#### 調査区全体（総破片数）

分布は流路1が存在するグリッドに分布が際だって多く、流路2も周辺に比べて多いところが部分的に認められる。D・F ランクはK—32区に最も多く、これはA ランクの出土が多いグリッドと一致する。原因としては、土器がまとまって出土したグリッドは、周辺よりも精査されるという発掘調査の精度の違い等が考えられる。また、F ランクは流路1が存在するグリッドにも多い。E ランクも流路1付近に多い。これは土器が移動し、流路の凹みに落ち込んだものと推測される。

全般的に、破片は流路とその周辺に多く分布している。流路1付近はほぼ全体的に、流路2は部分的に分布が多いグリッドが認められる。さらにM—O—33区にも比較的多いが、ここにIV層が落ち込む地形が認められるためと考えられる（図9参照）。

流路1の北と南側は出土が少ないが、これは包含層が削平を受けているためと判断される（図12参照）。また、33ライン～35ラインには全般的に多くの出土が認められる。ここは旧国道の盛土の下にあたり、そのために残りが良かったと考えられる。

#### Ⅲ群

調査区の西側に集中しており、他の地点からの出土や、A ランクのものは全くみられない。20点すべての破片を観察した結果、程度の差はあれすべて摩耗していた。調査区の西側外にあるさらに高位の段丘から二次堆積したものと推測される。

#### Ⅳ群

全体的に総破片と同じ分布のあり方である。流路1が存在するグリッドに多く、南北両側は少ない。

流路2には多く出土しているグリッドが部分的に認められる。AランクがJ・K—32区に最も多く、この付近が活動空間であると推測される。CランクはIV群の全点数の出土のあり方とほぼ同じ様相を呈する。

#### V群

流路1が位置するK—35・L—36区に最も多い。次にH—31～34区の周辺に多く、集中する場所は二カ所と判断される。また、AランクはH—34区から出土しており、活動空間であると判断される。B1・Cランクの分布も同様である。

以上のことをまとめる。縄文時代中期(Ⅲ群)は調査区外のさらに高位の段丘が活動空間で、後期(Ⅳ群)は、流路1とそれの上下の段丘、及び流路2に部分的な活動空間を有する。復原掲載土器は、後期中葉のもの(Ⅳ群b類)が比較的広い範囲で出土し、後期後葉(Ⅳ群c類)のものがI—33・34区つまり、流路2で部分的に出土するといった相違が認められる。また、晩期(V群)は流路1・2に部分的な活動空間をもつ。

このようにみていくと、古い時代は高い段丘を利用し、時代が新しくなるにつれ、低い段丘を活動の場所としていると判断される。川の下刻作用により、順次形成される段丘を利用し、常に川の近くに活動の場所を求めていたものと考えられる。

#### (7) おわりに

以上土器の残存のあり方について述べ、分布図から各時期の活動空間を推測した。通常発掘調査における包含層調査とは遺物の出土状況について調べることである。近年、旧石器時代の遺跡を対象に遺物包含層における遺物の分布のあり方を解釈する試みが行われている(小林 1997など)。これらは遺跡形成過程研究の実践例としてその有効性を提示している。本例は、土器そのものの残存のあり方から考えた土器の移動の程度、そして不動性について仮定し、それを踏まえ分布図から遺跡における時期別の活動空間を考えた。これは数値のみから得られた結果を、裏付けるのに有効な傍証となりうるものと考えている。

用いた基準は、本来的には接合、型式認識に視点を置いたものであり、部位と残存の状態の両者を合わせて一つの基準としている。今回試みたことを厳密に実践するならば、「部位」、「残存状態」に分けてそれぞれ基準を設け、適用するのが理想である。さらに、剥離・剥落、摩耗の度合いを段階的に区別し、土器の使用のされ方や強度、そして遺跡の地形等もランクの決定に関与することも考慮する必要がある。今後、先に掲げた条件を満たした上で、さらに試みていきたい。(末光正卓)